身体毀損の噂に見る社会の表象

渡辺良智

〔キーワード〕 噂，都市伝説，身体毀損の噂，臓器泥棒，インドネシア，アフリカ，首狩り人，食人，資本主義

1. はじめに

噂とは何か。それは，確実な根拠のない，インフォーマルな出所不明の情報が社会の中に出現し広まっていく現象のことである。一般的に噂は，間違った信用できない情報で，人々の不安を高め，パニックを引き起こす，モッブ・暴動の引き金になる，などとしてネガティブにとらえられている。

アメリカでは社会学および社会心理学における噂の研究は，第2次世界大戦中に戦時流言対策の観点から流言の研究が推進され，社会心理学者のオルポートとポストマンは伝言ゲームの実験によって噂の伝達における歪みとして平均化・強調・同化といった3メカニズムを確認した。さらに彼らは，噂の流布は，その噂の聞き手に対する重要さと曖昧さの積に比例するという噂の流布の公式を提唱した。彼らのこの公式は現在でも広く受け入れられている。また，オルポートらの研究をまとめた『噂の心理学[1)]』（1947）は噂研究の古典となっている。

その後，社会学者のシブタニは『即興のニュース』（1966）で，曖昧な状況にともに置かれた人々が状況に関する知識を出し合って作り上げる解釈＝即興のニュースが流言であると主張した。オルポートらのようにもともとあった情報が伝達途上で歪んでいくと考えるのではなく，人々が協力して作り上げる，状況に関する解釈が流言であると主張した。また，ロスノウとファインの『流言とゴシップ』（1967）では，特定の人物に関するおしゃべりであるゴシップに関心を向けた。以後，噂に対する関心は衰退し，細々と研究が続けられていた。そして，今世紀に入り，社会心理学的噂研究は，ディフォンゾとボルディアの『噂の心理学』（2006）で集大成された。彼らは，噂をつぎのように定義している。

「立証されていないが，道具的に関連ある情報的言明が流通していること。それは曖昧，危険，あるいは潜在的脅威といった状況下で生じる。そして人々が危険を意味づけし処理する手助けとなる[2)]。」

一方，1980年代に噂の研究に大きな方向転換が起きた。ブルンヴァンが「都市伝説」という用語を提唱し，『消えるヒッチハイカー』『喉を詰まらせたドーベルマン』『メキシコから来たペット』など精力的に都市伝説の集成を発表したことによって，都市伝説が噂の研究の中心となったのである。アメリカだけでなくヨーロッパ，日本などでも噂の研究者は都市伝説に関心を向け，都市伝説を集めた本が次々に出版され，都市伝説はブームとなった。また，この種

の話は都市だけでなく農村でも聞かれるので都市伝説というより「現代伝説」のほうが適切だという主張もあるが，都市伝説という用語が主流となっている。

都市伝説とは何か。前出のディフォンゾらは，都市伝説をつぎのように定義している。

「都市伝説は，異常な，ユーモラスな，あるいは恐ろしい出来事についてのストーリーで，現代世界に関連するテーマを含んでいる。それは実際に起こったこと，起こったかもしれないこととして語られる。多くの場所や時点で似たような話が聞かれる。そして道徳的な意味合いを含んでいる[3)]。」

また，伝説は，英雄の冒険や王様やお姫様など有名人に起こった不思議な出来事を語る話であるが，都市伝説は無名の個人，普通の人々に起きた出来事について語る話である。さらに，「友達の友達」（friend of a friend）から聞いた話なのでFOAFと略称されるが，伝え手を順番に辿っていっても途中ではっきりしなくなり話の起源には辿りつけない。また，流言はある出来事について語っているが，都市伝説は誰にでも起こりうる繰り返される出来事について語っている。一般に都市伝説は，流言と比べてメッセージが長い。都市伝説には過去の伝説が形を変えて現れており，起承転結のような話の構造がある。都市伝説は，楽しみのために語られる。そこで，流言ではメッセージの真偽が重要であるが，都市伝説では受け手がその話を信じるか信じないかという信疑が重視される。都市伝説は，現代社会の危険に対する警告を伝えている教訓話でもある。

そして，日本で噂研究をレヴューした川上善郎の『うわさが走る』（1997）では，流言，ゴシップ，都市伝説という噂の3分類を採用し，社会情報としての流言，おしゃべりとしてのゴシップ，楽しみとしての都市伝説，と定義した[4)]。この流言，ゴシップ，都市伝説という噂の3分類は，キンメルの『噂と噂のコントロール』（2003）やディフォンゾらの『噂の心理学』も，受け入れている。

さらに，都市伝説は，実際の出来事について語っているのではなく，楽しみのために話されているので，その場で消費され聞き捨てにされる話だと考えられる。アメリカでは，都市伝説の例として，ドライブ途中で車に乗せたヒッチハイカーが消えてしまう話やハンバーガーやコーラなどの食品が汚染されているという話，住宅の2階やベッドの下に潜んでいる凶暴な犯罪者の話，さらにはショッピングモールやテーマパークで子どもが誘拐される話などが挙げられる。

ところで，ディフォンゾらがいうように，都市伝説が，単なる教訓話を超えた現代社会に関するメッセージを伝えているとしたら，それは何だろうか。

2. 都市伝説と噂神話

ここでアメリカから中南米に目を向ければ，噂・都市伝説の内容はユーモラスというより深刻なものが目につく。現地の子どもたちが誘拐され，あるいは買われて，アメリカへ送られ，金持ちの子どもたちに移植されるために殺されるという子どもの臓器取りの話や中南米の子どもたちが白人の悪漢に目を奪われるという目取りの噂が聞かれる。これら身体毀損の噂は，開

発途上国と先進国との関係に言及している。天然資源や農産物と同様に子どもも開発途上国から先進国へ送られ移植用資源として利用される，先進国の移植医療は，先進国で不足するドナーを開発途上国に求めていると語っている。先進国で不足している資源を開発途上国に求めていると訴えているのである。

これらの噂話は，楽しみのための話，単なる教訓話として聞き捨てにできないような深刻なメッセージを含んでいると考えられる。そこで，人類学者の中には，都市伝説はぞっとする，個別の出来事でなく，現在進行中の繰り返される出来事について語っているので，現代神話形成途上の重要な形態ととらえ，それらを「噂神話（rumor myth）」と呼んでいる者もある。噂神話は，神話と歴史の境界に，実際に起こったことと想像されたことあるいは「構築されたこと」との境界に，事実と幻想の境界に存在しているので，意味があるとされるのである[5)]。

そして，ウィンツラーは，噂神話の4つの主要テーマを提案している。第1は，（少なくとも貧しい開発途上国においては）現地の一般庶民と欧米人，あるいは地域の金持ちまたは腐敗した政府の役人との間の富と権力の大いなる格差に関するものである。第2は，見知らぬ人あるいは外国人，しばしば欧米人に対する不安に関する話である。第3は，先端技術に対する懸念が表明されている話である。第4は，あることを誰が誰に対してするのが適切かという想定を転倒させた話である。

第2，第3のテーマの例としては，イラクではイラク戦争時に米軍が使用した夜間暗視ゴーグルでイラク女性の身体が透視できるという噂が聞かれた。暗闇の中でも見えるゴーグルならば，衣服の中も見えるのではないかという噂であるが，女性は家族以外の他人に対して身体を露わにすべきでないというイスラムのタブーに触れる噂でもある。第1，第2，第4のテーマに関連する現代アフリカのカニヴァリズムの噂としてはつぎのようなものがある[6)]。

① 中央アフリカでは今日まで子どもを食べる，男あるいは女の，人食い鬼についての伝統的神話がある。また広く信じられている現代神話もある。それは夜間ローリーに乗ってあちこちを回って黒人の子どもを見つけると，解体し食べるために連れ去ってしまう白人についての話である。もしもこの神話の妥当性に誰かが疑問を出すと，説得的な状況証拠が示される。それは，どこかヨーロッパ式のホテルに行って，常に大量の肉が，焼いたりシチーにしたりソーセージで出されるのを自身の目で見てみなさい。これだけ法外に大量の肉食性の食事が継続されるためには，仲間の人間を料理する以外に方法があるのかというものである。

そして，第1テーマから第4テーマまでのすべてに関連するのが，後節で取り上げるインドネシアにおける誘拐と生贄の噂である[7)]。

また第1，第2，第3に関連するテーマとしては，人々が誘拐され人体の臓器が取り出されて金持ちの臓器移植用に売られるという身体毀損の噂がある。この噂（子どもの臓器取りの噂はその一部である）は，ブラジルをはじめとする中南米，アフリカ，アジア，さらに東欧諸国で聞かれる。このような事態が自分たちに起きるのではないかという貧しい人々の不安をこの噂

は表している。

ところで，人類学者のダグラスによれば，「人間の肉体に刻み込まれるのは社会のイメージなのである[8]。」この命題が正しいとしたら，人々が自分たちの身体が毀損されると訴えている噂は，その噂が生まれた社会のイメージを刻み込んでいると考えられる。そこで，本稿では身体毀損の噂を取り上げて，これらの噂・都市伝説が現代社会について伝えているメッセージの解読を試みたい。

3. 身体毀損の噂

ここでアメリカに戻ってみれば，アメリカの都市伝説においても，身体毀損の噂が有力な1ジャンルとなっていると思われる。欧米先進国では20世紀の最後の4半世紀に臓器移植という先端医療技術が登場し普及した。だがその一方で移植用臓器は慢性的に不足している。そして，一部の国においては臓器売買が現実に行われている。これらの事情が相俟って，身体の一部が奪われる，毀損される，臓器が盗まれるという都市伝説が生じていると考えられる。

そして，都市伝説研究者たちもこれら身体毀損の都市伝説に注目している。例えば，ドノヴァンの『知る方法のないこと[9]』（2004）は犯罪と都市伝説との関連について書かれているが，「スナッフ･フィルムの市場」「ショッピングモールやテーマパークでの誘拐」とともに「盗まれる身体のパーツ」を取り上げている。ファインとエリスの『世界規模の噂[10]』（2010）では，テロ，移民とともに「身体の世界的取り引き」といった都市伝説が取り上げられている。さらに，身体関連の都市伝説だけを扱っている本も出ている。例えば，ベネットの『身体[11]』（2005）では，体内の動物，毒と蜜，エイズ攻撃者，放蕩息子を殺すこと，所有権を奪うこと―身体強奪者，血と赤ん坊，といった身体関連の6テーマを検討している。

さらに，身体毀損の噂・都市伝説に焦点をしぼった研究書としては，キャンピオン・ヴィンセントの『臓器取りの伝説[12]』（1997）があり，臓器取りの噂として，アメリカなどの腎臓泥棒の噂，中南米の子どもの臓器取りの噂，目取りの噂といった3種類を挙げている。

だが，身体毀損の噂は，当然ながら，これら3種の臓器取りの噂に限られるわけではない。筆者はすでにアフリカの吸血鬼とアンデス高地で脂肪取りをする悪魔ピシュタコの噂について検討を試みた[13]が，これら以外にも身体を毀損する噂がいくつも聞かれる。

一例として，アフリカの数カ国における噂を取り上げてみよう。アフリカ南部のジンバブエではつぎのような不思議な噂が聞かれる。

② 近頃，子どもたちや十代の若者たちが家から遠く離れたところで発見される。彼らの頭部や内臓は取られている。……薬に混ぜるために心臓を買う魔術師もいる。頭部は，大洋である種の大きな魚を捕まえる餌として使われる。この魚は人間の肉をとても好むと言われる。この魚が捕まると内部にある宝石を取り出すために切り裂かれる。

③ ある女性が人の頭部を持っているのが見つかった。発覚後，彼女はノロロン錠剤を過剰摂取して自殺した。人の頭部を取り引きしている人々はコンビを手に入れるためにそうし

ている。人の頭部はある種の大きな魚を捕まえるための餌として使われる。その魚の腹の中には宝石があると言われている。

これらの噂は，お金に対する人々の欲望が膨らんだために起こりうることとその原因について語っている。ジンバブエで人の頭部が奪われて豊かな隣国の南アフリカに運ばれ，コンビと交換される。コンビとは，現地でバス代わりに使われるミニヴァンのことで，バス事業は高収益が得られるのである。人間の肉は宝石（富）を手に入れる手段である。噂は，金持ちになった人々は，不正な邪悪な手段で富を手に入れたと批判している。そして，南アフリカの新聞にはつぎのような記事が載った。これは噂でなく，事実に入るだろう。

1996年4月29日，ヨハネスバーグのあるショッピングモールで「2個の青い目を売ろうとして」38歳の男が逮捕された。この事件は，ストリートチルドレンが伝統的医療のために殺されることと関連があるだろう。人体の一部は，生殖，ビジネスの成功，恋愛の幸運のために一片ずつ用いられている。白人の子どものそれが最も高価である[14)]。

マダガスカルでは，ヨーロッパ人（フランス植民者，伝道者），アジア人（中国人とインド人の商人，北朝鮮の建設コンサルタント）のみならず，州政府役人が，吸血鬼とか心臓泥棒とか言われている[15)]。その噂は，現地の人々から見ると外部の人々が，彼らの資源を奪っていると言っている。さらに，臓器取り，吸血だけでなく，後述するように，東南アジアやアフリカでは首狩り，食人に関する恐ろしい，不気味な噂も聞かれる。先進国から開発途上国まで世界のあちこちで聞かれる，これら身体毀損の噂をどう考えるべきだろうか。

本稿では，身体毀損の噂の中で，アメリカの腎臓泥棒の噂，インドネシアの首狩り人の噂，ナイジェリアの人食いの噂，といった3種の奇怪な噂を取り上げて考察してみよう。先進国，中進国，開発途上国という3つの社会の噂を比較することによって考察の手掛かりが得られるかもしれない。また，噂の中で被害者に悪事を働く犯罪者がどう表現されているかを見ることで，悪人とされる他者やリスク社会の表象を知ることもできるだろう。

4. アメリカの腎臓泥棒の噂

アメリカの腎臓泥棒の噂というのは，地方から大都市にビジネス，あるいは遊びに出かけた男性に起こった出来事について語るつぎのような噂である。

④　週末，数人の若い男たちが，ニューヨークへ遊びに行った。その中の1人はホテルのバーで出会った女性に魅かれて彼女と一緒に一晩過ごすからと言って，皆と別れた。翌日，彼から電話があった。「僕は今あるホテルのある部屋にいると思うが，どうも体調が悪いので迎えに来てくれないか」友人たちがその部屋へ行ってみると，彼はシーツに血がべったり付いたベッドに弱々しく横たわっていた。ベッドから連れ出そうとすると，彼の背中に

新しい手術跡と血が付いていた。あわてて病院に連れていくと，彼の腎臓の1つが取り去られていた。臓器売買のブラック・マーケットで売る腎臓を取るために，彼は酔わされたということがわかった。

⑤　土曜日の夜，ある男があるパーティーに行った。彼は，ビールを2杯飲み，ある女性が彼に好意をもって，もう1つパーティーに行きましょうと誘ったので，彼女について行った。あるアパートで行われていたパーティーに行き，酒を飲み，さらに何かわからないドラッグも飲んだ。そして記憶をなくした。気が付くと，彼は裸で氷の詰まったバスタブの中にいた。ドラッグはまだ効いていたが，周囲を見渡しても誰もいなかった。彼が胸を見ると，「911に電話せよ，さもなければ死ぬ！」と赤い口紅で書いてあった。バスタブの近くに電話機があったので電話して，救急のオペレーターに事情を話すと，背中をチェックするように言われた。確かめると背中の下に9インチの傷が2つあった。バスタブにすぐに戻るように言われ，救急隊が来た。検査後，事情が判明した。彼の腎臓は2つとも盗まれていた。ブラック・マーケットでは腎臓1個が1万ドルで売られている。2番目のパーティーはにせもので医学生が含まれていた，ドラッグも遊び用ではなかったと考えられる。彼は，今病院で生命維持装置につながれて移植できる腎臓を待っている。

実際にこういった事件が起きているという救急や警察関係者の証言は聞かれないので，これらは都市伝説である。これらの現代版ホラー話は楽しんで聞き捨てにすれば済むのである。そして，これらの話は，移植用の臓器が慢性的に不足しているので，自分の臓器が狙われているのではないかという現代人の不安を反映している。

ところで，氷の詰まったバスタブというのはかつて不治の病気を治療するために血の風呂に漬かったと言われた王様の伝説がもとになっているのではないかと考えられる。⑤の話の中で，赤い口紅でメッセージが書いてあるのは「エイズの世界へようこそ」の話に由来している。女性が男性に危害を加えるというテーマは，エイズに感染した女性が感染させた男性に復讐する「エイズ・メアリー」の都市伝説によるのかもしれない。また，噂の中では女性が男性に復讐することから，現実社会で弱者の女性が強者の男性に勝つという地位の逆転を読み取ることもできよう。

これらの都市伝説では，被害者は地方出身の男性で，加害者は大都市の魅惑的な女性である。純情な地方出身者が邪な都会人に騙されて大事な臓器を取られてしまう。これらの都市伝説は，現代の大都会に潜む罠，危険を警告し，うまい話には恐ろしい結果が待っているから気を付けろというメッセージを伝えている。

これらの都市伝説には，主人公＝被害者と女性＝加害者以外に，彼の友人，救急隊，医学生が登場するものの，被害者と加害者の2人を中心にはストーリーは展開する。個人対個人という先進国の人間関係が見られる。恐ろしい犯罪の背後に，盗まれた臓器が売買されるブラック・マーケットが存在すると言うが，具体的な説明はない。要するに，個人主義の浸透した先進国では個人に危害を加える他者とは，個人である。また，先端医療により生じる恐ろしい犯罪に遭う原因も甘い罠に引っ掛かった個人の不注意によるのであり，個人の責任を強調している。

5. インドネシアの首狩り人の噂

東南アジアの多島国インドネシアでは，人々の生活環境は島ごとにまた大都市からジャングルまで大きな相違がある。同国の辺境地帯では，誘拐と生贄，来訪する首狩り人，といった奇怪な恐ろしい噂が聞かれる。

ボルネオ島，フローレス島などでは，この種の噂から住民の間にパニックが繰り返し生じている。例えば，1979年2月，ボルネオで首狩り人の噂によってパニックが生じた。地元新聞の記事によれば，コタキナバルの警察署長は，ある噂が町に生じたときその噂を言いふらすことは犯罪であるという警告を発した。その噂は首狩り人が幼い子ども，特に女児の頭部を求めて街路を徘徊していると言っていた。ある袋の中に頭のない死体が見つかったという噂が生じたので，警察が調べた。噂通りその袋はあったが，鶏の足と水牛の皮が入っていただけだった。その後，首狩り人はサンダカンへ行ったと噂された。サンダカンの小学生は車のナンバーのリストを持たされて帰宅した。該当するナンバーの車に首狩りのダヤク族が乗っているので避けるように言われた。3月になっても「ダヤク恐怖」は人々の会話から消えず，別れの挨拶も「ごきげんよう」から「首狩り人に注意！」に変わった[16)]。

これと類似した噂パニックについて，1989年から1993年まで『オセアニア』誌に4本の論文が発表された。噂の基本的な言説はつぎのようなものである。

「政府が，ある村の近くで，鉄やコンクリートの橋を建設中であるが，その基礎に入れて補強するために人間の生贄が必要とされ，秘密のエージェントが，人間の頭部を探すため，あるいは生贄の犠牲者を誘拐するために，派遣された。」

最初に問題提起したドレイクによれば，この種の噂はボルネオでは90年以上前から聞かれており，噂を聞いた現地住民を恐怖に駆り立てていた[17)]。そして，ボルネオにおける噂パニックは5つの要素とモチーフをもっていた。それらは，①誘拐（あるいは首狩り），②建設のための生贄，③州政府が犯罪者，④道具としての外部の人間に対する恐怖，⑤ダヤク族（原住民）の犠牲者，である。これらが結びつき，現地の文化的論理を背景に噂に信憑性が与えられた。19世紀末に州政府が禁止するまで首狩りは実際に行われていた。大型建造物建築のための生贄は「生命を与えるための死」神話として世界中に広く見られる慣習であるが，現地ではオランダが持ち込んだものであった。州政府による橋，道路といったインフラ整備や大型建造物建築は州政府の勢力が現地に浸透してきていることの表れでもあった。また，首狩りは，ダヤク部族間の関係の調整手段であった。それが州政府によって禁止され，大型建造物建築の際に生贄を捧げるという新しいやり方が採用された。そこで，この噂は，州・部族関係に対する強烈な感情を表現していると考えられた。その噂は，疑わしい外部の人間，恐ろしい州の政策というステレオタイプに符合するものでもあった。そして，部族の自治権が州政府によって奪われていると言っている。この噂は，弱者が強者に対して，怒り，恐怖，不安を表現するためのイデオロギー的な武器であると彼は言った[18)]。

ところが，フォースやエルブによれば，首狩りや生贄の風習のなかったフローレス島の中部や西部でも同じような誘拐や生贄の噂が生じ，それによって現地の人々がパニックになってい

た。これをどう解釈するのか。フォースは，同島中部の人々の誘拐の噂に対する恐怖は，オランダ到着後の植民地下で生じたものであると考えた。つまり，オランダの生贄の風習から生じたものである[19]。エルブは同島西部の人々のパニックはヨーロッパ人宣教師が噂の震源だとした。宣教師たちが建築を企図していたので建築のために生贄を求めているとされた。ヨーロッパ式の医療も建築用生贄を確保するためではないかと原住民は恐れた。誘拐する外国人に対する現地の人々の恐怖はかつての奴隷狩りの経験によるのかもしれないという[20]。バーネスは，建築用生贄に関連する首狩りの噂パニックは，植民地時代以後のものでなく，インドネシアの古くからの生活の特徴と権力者の力の誇示によると考える。建築用の生贄は，ビンロウジュの実，ヤシ油，卵，鶏，ヤギ，豚，水牛というランクがあり，人間の生贄は最高のものである。大きなプロジェクトが企図されたとき州や指導者の力を誇示するためには生贄のランクが高いほど力が誇示できる。人間の生贄もありうることと考えられた。また，オランダは首狩り，奴隷，地域の内戦を禁止したが，オランダが現地の勢力に取って代わった面もあったので，禁止の動機を疑われた。また，征服の過程で，首狩り，誘拐，村々の襲撃も行われた。こういった歴史があるので噂に信憑性が与えられたのである[21]。

ボルネオ島東南部メラタス山地の村でも1981年春，政府の首狩り人の噂が聞かれた。国営石油会社の原油掘削機の具合が悪いので，機械の機能を安定させる儀式のために政府はジャワ人労働者に人間の頭部を獲得するよう命じた，警察も軍も襲撃者には自由にやらせるよう達しが出た，石油生産のために首狩り人と盗賊がそれぞれ500人公認されている，といった噂であった。これらの噂で村人の恐怖は高まった。それに対応して，夜，見知らぬ人が歩いているのに出会った，木の下に見知らぬ男たちがいた，とか言われた。また，近くの村からは水汲みに出かけた少女の首のない死体が見つかったというニュースが届いたが，この騒ぎもやがて沈静した。この噂パニックも前述の5つの要素を備えていた[22]。州政府だけでなく，国営石油会社という政府系の会社も首狩り人とされている。

1983年，フローレス島中部の村で現地調査した人類学者の杉島敬志も首狩り人をめぐる噂パニックを報告している[23]。その噂とは，恐怖の季節と呼ばれる期間，見知らぬ異人が村をおとずれるが，その目的は，女性（とりわけ妊娠中の女性）や子どもに襲いかかり，その首を狩るためである。また，この首狩りを行う異人は，妊娠中の女性の腹を割き，胎児を奪うとも言われた。人々の恐怖心は高まり，すでに首狩り事件が起こったという噂がどこからともなくわきおこり，村から村へ伝えられていく。この時期，多数の女性や子どもが首狩り人と遭遇する。村全体が緊張した雰囲気につつまれ，男たちが山刀や槍を持って首狩り人を探しにいくが，常に失敗に終わる。過去から現在にいたるまで1人として首狩りの犠牲者はいないし，惨殺死体を見た人もいない。そこで，首狩りがなされたという噂も，根拠のない噂にすぎず，首狩り人は人々が思い描く幻想である。そして，恐怖の季節の最盛期と稲刈りの時期がほぼ完全に重なりあうことから，周期的におとずれる首狩り人とは，人々によって行われる稲刈りのことであると杉島は解釈する。「稲穂は，イネの頭部である。だが稲穂は，妊娠と出産を経て誕生した，イネの子どもである。稲刈りでは，この稲穂の首が，竹のナイフで切られ，母たるイネから引き離されるのである[24]。」

なお，2000年にスンバ島で聞かれた噂では，乾季にやってくる外国人ツーリストが首狩り人と見られ恐れられていた。その噂は，つぎのようなものである。

⑥　彼ら外国人ツーリストは夜，金属の小箱を持って市街を徘徊している。［金属の小箱とは，カメラのことである。］彼らは，長い髪と乱れた衣服で来て，パイプでタバコをすう。その煙を浴びれば眠くなる。彼らは子どもの顔に煙を吹きかける。すると子どもは意識を失う。彼らは子どもを捕まえて逆さに吊るす。足をたる木近くに頭をカメラの近くに置く。その頭に穴をあけゴムホースを使って血を吸い出し，カメラに流入するようにする。彼らは血を集めて子どもの身体は残しておく。子どもは生命力の大部分を失ってやがて死ぬ。外国人は血を集めて母国の工場へ持ち帰る。そして，電気製品―ラジオ，テレビ，テープレコーダーの汚れを洗い落とすために血を使うのだ。電気が金属のつるの中を流れるのは，血の力による。人間の血がなければ，電気はうまく働かない。

これら一連の噂から窺われるのは，現地の人々の外部の人間に対する強い恐怖心である。他部族はもとより，オランダ植民者や宣教師，ツーリストなどヨーロッパ人をはじめとする外国人，そして部族の自治権を奪う州政府が，外部の人間＝他者であり，彼らに危害を加える首狩り，誘拐の犯人だとされている。

6. ナイジェリアの食人の噂

アフリカ西部にニジェール（Niger），ナイジェリア（Nigeria）という隣接する2つの国がある。これら両国は，この地域が仏領と英領に分けられて植民地にされたので，英語の国名表記では，後者が2字多いだけである。だが，現在，両国の差は大きい。ナイジェリアは人口約1億5000万人でアフリカ全人口の2割を占め，国民1人当たりの年間所得は1000ドルを超えるが，ニジェールは人口約1500万人，国民1人当たりの年間所得は約340ドルで世界最貧国の1つである。ニジェールはサハラ砂漠南縁のサヘル地域にある乾燥地帯のイスラム教内陸国であるが，ニジェールの南に位置するナイジェリアはギニア湾に接している。かつては奴隷が主要な輸出品で積み出し港のある同地域は奴隷海岸と呼ばれていた。北部のサハラ砂漠に続く乾燥地帯と南部の熱帯雨林地帯とに分かれる。また，多数の部族がいて，3大部族は北部のイスラム教信者のハウサ族と東部のキリスト教信者のイボ族と西部の両教信者混在のヨルバ族である。部族対立がみられ，東部のビアフラが独立を求めて1967年から70年まで戦った内戦が最大のものであった。さらにナイジェリアの東部では石油が発見され，工業化が進んだ。東部のイボ族は教育レベルが相対的に高く，植民地時代は下級官吏や軍人を輩出した。商才もあり「黒いユダヤ人」と呼ばれている。このイボ族が独立を求めて起きた内戦が，ビアフラ戦争であった[25]。

両国の間には前述のような大きな経済格差があるので，ニジェールからナイジェリアへ仕事を求めて出稼ぎに行く労働者は少なくない。出稼ぎ先での苦しい生活を反映してか帰国後にナイジェリアで食人が行われているという噂が生じた。この噂を検討してみたい。

⑦　ある男がナイジェリアのある町へ妻を連れていった。その町では，イボ族が，殺して食うために人間を買うと言われている。この男は，お金がほしかったので，あるイボ族に自分の妻を売り払った。買い手は彼が約束通り「商品」を届けることを信じていたので，彼は，前以って支払いを受けていた。彼は，すぐに何か食べ物を持ってくると言いながら，計画通り妻をある家に残して立ち去った。妻は，赤ん坊を連れていたが，夫はその子も食人するイボ族に売っていた。見知らぬ町で行きたいところもなかったので妻は外に出なかった。4時間以上待ったが，夫は戻らなかった。かわりに男たちが入ってきて彼女を他の部屋へ連れていった。そこで何人かの囚人が鎖につながれているのを見た。数分後に彼女の目の前で1人の囚人の喉が切られた。その後，男たちは翌日の昼食と夕食のために殺される犠牲者を指名した。彼女は自分が次の犠牲者でなく数日は生きられることを知った。翌朝赤ん坊は殺されて昼食用に料理された。彼女は泣くことしかできなかった。食事として1切れの肉が出されたが1口も食べられなかった。彼女は泣き続けた。そして，夫がお金をつくるために彼女を人食いに売ったことを理解した。数日後，彼女の死ぬ番になった。全ての処刑を行っていた男がやってきたが，決まった時刻になっていなかった。処刑はあらかじめ決められた時刻に行われていた。確立したルーティーンを尊重することは非常に重要だった。処刑者は彼女を殺すまで暫らく時間があったので，ベッドに横たわって休んだ。彼女はゆっくり彼の方へ這っていった（彼女の鎖がどうしてはずれたかは不明）。彼が深い眠りに入ったことを確認して，彼が犠牲者を殺すために使っている大きな剣の1つを取り上げて彼の腹に突き刺してベッドに留めた。彼はもがいていたが死んだ。囚人が縛られていたロープがあったので，彼女はそれを使って閉じ込められていた2階の部屋から地面に降りた。降りる前に彼の腰についていた鍵を奪った。彼女は地面に置いてあった小箱を見つけた。それは鍵の1つで開いた。その箱の中には連れてきた犠牲者と引き換えに支払われるお金がたっぷり入っていた。彼女は帰国のための交通費と何らかの食べ物を買うのに必要なお金としてありあまるお金を手に入れすぐに逃げた。外に出て駆け出し北に続く道を発見した。バイクをつかまえ隣町まで行った。そこで知り合いの男に会い，いくらでも謝礼を払うからと言って，彼女の村まで車に乗せてもらって帰ってきた。

一方，彼女の夫は自宅に戻ると，義理の父母には，妻が市場へ行ったとき，乗っていたバイクが事故に遭い，全員死んだと伝えた。そして彼は妻子の死を悼むふりをしていた。

妻は夫に知られないように生家に帰ってきた。死んだとばかりに思っていた娘が帰ってきたので，驚き喜んでいる両親にそれまでの出来事を話した。両親は夫の正体を皆に暴露するため，娘の帰宅を隠しておいた。妻の葬式の日が来た。大勢の村人たちがお悔やみにやってきて食事が振る舞われた。男たちは屋外のテントの下に座り，女たちは屋内に着席した。つまらないおしゃべりが感情を表してはいけない死者の母や姉妹にとって気晴らしになり苦悩を和らげるとされていた。夫は妻子がどのように事故に遭ったか友人と思い出していた。妻は夫の隣に座っていたが，顔をヴェールで隠していたので，夫は隣にいる女性の正体がわからなかった。悲劇話が終わったとき，隣の女性がヴェールをとり，顔を見せた。両親は夫と対決した。「この女性を知っているか？」彼は驚きと狼狽で言葉を失っ

た。妻のはっきりとした生き返りの驚きから全員がさめたとき，罪を犯した夫は妻の兄弟によって警察に連行され，裁判にかけられ，刑務所に送られた。

⑧　あるところに，若者や子どもたちに人気のある男がいた。彼らをナイジェリアへ連れていくし，ハードな消耗する仕事をしなくても月に30～40万CFAフラン稼げると請け合っていたので。このやり方で彼が誘った若い男女はとても多かったので，一度に30～35人集めるのに苦労しなかった。そして彼はしばしば幸運を探す決意をした若者を大勢ひきつれてナイジェリアへ出かけた。だが彼は変わることなく1人で帰ってきた。移民の両親が息子や娘の行方を尋ねると，彼らが今どこにいるかは知らない，最後に見たときはうまくやっていたと答えていた。

ある日，彼は3人の若者と出発した。その中の1人は彼の甥であった。ナイジェリアに着くや，3人の若者は人肉を食って生きているイボ族へ売り払われた。甥はある家に連れていかれた。そこには自分の喉を切られる順番を待っている囚人たちが鎖につながれていた。その日は4人が命を失っていた。次は彼の番だった。数秒前，剣が彼の喉に突き付けられたとき，処刑者の1人が彼らは次の食事用に十分「肉」を持っていると決めた。若者は翌日まで命拾いしたことに気付いた。その夜，彼は悲嘆と不安に圧倒されたので，神に向かって祈り，彼を脅かしている危険から救ってくれたら，衣服の供物を気前よく差し出すことと生贄の動物を与えることを約束した。しばらくすると，鎖が緩くなっている感じがし，すぐに消えてしまい，彼は解放された。その家には1ダースのドアがついていた。彼が触る前にそれらが開いて彼は外に出た。その家から逃げ出した。外は真っ暗でどこにいるのかどこに向かっているのかわからなかったが，日の出まで走り続けた。彼はアスファルト道路の上に立っていることに気付いた。通りかかった車をとめた。いきさつを話すと隣の町まで送ってくれた。そこで他の乗り物を見つけ，ついに自宅へ帰る道を見つけた。両親が彼を見たとき，何が起こったのか，どうしてそんなに早く帰ってきたのかと訊いた。両親はおじがナイジェリアから戻ってきたとき，こう聞かされていた。甥は良い仕事を見つけたので，しばらく国外にいるだろう。健康状態もいいと。甥は怒ってどうやって辛うじて死を免れたのか詳しく話した。ナイジェリアへ向かった若者が仕事を見つけることは全然なく，食人に耽っているイボ族に売られていたことが，全ての人々にとって明らかとなった。若者はサダカの日まで帰宅を秘密にしておいておじと対決し，ナイジェリアへの旅がどんなものであったかについて話した。罪人は，彼の非道徳的なお金稼ぎを疑うことなく犠牲者となった若者たちの一部の両親によってその場で殺されそうになった。彼が最後の犯罪を試みるまでに10年以上にわたって，若者たちを人食いのイボ族に売っていたことを認めた。

⑨　ある男はかつて織職人だったが，人々が大量生産された衣服を買うようになったので，彼は織ることをやめて仕事を求めてナイジェリアへ出かけた。ある町で仕事を与えるという2人の男に騙されてついていった。彼らはその男をある家に閉じ込めベッドにつないだ。彼らの持っていた大きな剣から2人が食人者で殺すためだけに人々を捕まえているのだと気付いた。彼は，これら残忍な殺人者に憐れみや同情など期待できないこと，速やかに行

動しないと死が切迫することも知っていた。彼は次の犠牲者に選ばれた。死刑執行人の頭蓋骨コレクションに追加されたくなかったので，神に訴えて赦しを乞うた。神は彼の必死の懇願を聞きいれて彼を救いにやってきた。数秒の間に重い鎖がはずれ，家のドアは開いた。彼は飛び出した。丁度そのとき，処刑者の1人が彼を殺すためにやってきた。囚人には大きな剣をさける時間がなかった。イボ族は彼の頭を切り落とそうと剣を振りかざした。神は剣から彼を守るために再びやってきた。氷が溶けて水になるように剣が溶け始めたので，囚人は無傷で逃げのびることができた。近くの道路に行き着いたとき，1台の車が近づいてきた。ドライバーは隣町まで乗せてくれることに同意した。そこでニジェールへ戻るバイクをつかまえることができた。

いずれの噂話もニジェールからナイジェリアへ出かけた人々に降りかかった災難，死に直面した苦悩について語っている。話のモチーフ・主題は，ナイジェリアへ（出稼ぎに）行くことの危険を語っていて，共通であるが，⑦⑧と⑨とでは話の構造が異なる。⑦⑧では，主人公は，親族によって食人部族に売られるが，危機を脱出して悪人の正体を暴露して彼に復讐するのに対して，⑨では主人公は自ら危険に飛び込んで命からがら生き延びる。⑧⑨では，主人公が，命の危機から脱出する際に神の加護によると説明されているが，⑦では神は言及されず，助かった原因の説明がない。主人公の知恵，機転，超能力でなければ，幸運が味方したのであろう。大金入りの小箱や逃走用バイクをたやすく発見していることからそう考えられる。

これらの噂はどんなメッセージを伝えているのだろうか。どのように読み解くことができるのだろうか[26)]。これらの話から見えてくるのは以下のようなメッセージであろう。

まず，貨幣経済の浸透にともない，ニジェールの人々の生活に大きな変化が生じている。伝統的な共同社会や経済は崩壊した（⑨の話のように大量生産された商品に伝統的な生産様式は対抗できないのである）。そして，人間（労働力）も商品となった。さらに，貧しいニジェール人は，豊かなナイジェリアへ出稼ぎに行かざるを得ない。移民という商品は，⑧の話のように，貧しい国から豊かな国へ定期的に運ばれねばならない。だが，帰国する者は少ない。また，貨幣経済の浸透とともに，人々の貨幣に対する欲望は膨らみ，⑦では夫が妻子を，⑧ではおじが甥を，食人部族に売り渡す。お金のためなら非道徳的なことに手を染める人々も出てくる。親族であろうと他人と同様で信用できないと言っている。

そして，善良なニジェール人と極悪なナイジェリア人という対比を読み取ることも難しいことではない。⑨の話では，のんびりした農業・牧畜社会出身の人の良いニジェール人は，厳しい競争社会でもまれている，人の隙を狙っているナイジェリア人にころりと騙されてしまう。そこで，出稼ぎ先の資本主義の浸透したナイジェリアは，食人部族が待ち構えている危険に満ちている場所であるというメッセージが発せられる。

それでは，食人は何を意味しているのか。噂通りナイジェリアで食人が行われているということではない。人類学者のアレンズによれば，食人というのは，神話である。「普遍的なのは食人行為そのものではない。むしろ，『他者』を食人者と考える現象である[27)]。」そして，食人というこの集合的な偏見は，文化境界の構築と維持の一側面である。「人間の肉を食う者と食

わぬ者の間の境界ほど，はっきりしたものがあるだろうか。事実上，それは文明的な存在様態と野蛮な存在様態，『我々』と『彼ら』を分ける線を意味している[28]。」これらの噂話の中で野蛮なイボ族に食われるというのは，資本主義の下で働くことは人の生命を消耗するということのメタファーと考えられる。働き手，労働者は死ぬまで働かされるのだ。

ここで，資本を吸血鬼に例えているマルクスの『資本論』の記述が想起される[29]。

「資本は，ただ生きた労働の吸収によってのみ，吸血鬼のように活気づき，またそれを多く吸収すればするほど，ますます活気づく，死んだ労働である[30]。」

「労働者は『何ら自由な行為者』ではなかったということ，彼の労働力を売ることが，彼の自由であるという時間は，彼がそれを売ることを強制されている時間であるということ，実際には彼の吸血鬼は，なお搾取すべき一片の肉，一筋の腱，一滴の血でもあるあいだは，手放すことはないということが，発見される[31]。」

それでは，何故イボ族は，食人を行うと言われたのだろうか。彼らは，移住者にとって異質の理解しがたい民族である。彼らは，キリスト教徒で企業家精神に富み，工業化された資本主義に適応している。商才にたけ「黒いユダヤ人」と呼ばれている。一方，北の乾燥農業・牧畜業地帯から来たイスラム教徒の移民は，危険な資本主義を前にたじろいでいる。自分たちがイボ族に利用され食いつくされてしまうのではないかと不安を感じている。これが食人という表現になったのではないか。

また，囚人として鎖につながれるというのは，厳しい資本主義的労働規律のことを語っているのだろう。さらに，農業・牧畜社会の時間意識と工業社会のそれとは異なるとも言っている。⑦の「処刑は決められた時刻に行われていた。確立したルーティーンを守ることは非常に重要なのである」は，処刑を仕事と読み替えれば，近代産業社会の光景の描写である。

アスファルト道路，バイク，車も近代化の象徴である。これらは貧しい国の人々を豊かな国・幸運へ結んでいるが，また⑦のように交通事故という災厄・危険ももたらす両義的な存在である。ケニヤやタンザニアでは，現地の人々を捕まえて血を吸い取る吸血鬼は車に乗って，幹線道路に出没する[32]。マダガスカルでは吸血鬼は道路のつながった外部からやってくる。近代化の代償は高くつく。だが，3つの話に共通して，主人公は辛うじて処刑者の魔手から逃げのびる。このことは，資本主義の危険や恐怖は，自分たちの勇敢さや知恵によって克服できる，という希望のメッセージも伝えている。

7. 結びにかえて

欧米，日本など先進国では，人々の間で語られ聞かれ，消費される楽しみのために話としての都市伝説がブームとなっているが，不気味な恐ろしい都市伝説がよく聞かれる。開発途上国でも現代社会を象徴する怪奇な噂が聞かれる。これらの都市伝説や噂は，先進国，そして，中南米，アジア，アフリカの開発途上国の人々が懸念していること，想像していることを表出したものである。それらは，人々が曖昧な状況に置かれていて，不安が高まっているとき，噂が発生するという噂の研究の知見にぴったり合う。そして，現代のリスク社会に対する警告のメッ

セージを伝えている。

しかし，これらが都市伝説であれば，その噂が真実か否かは大きな問題ではないといえる。だが，臓器泥棒の噂は，サンパウロの女性が子宮の手術を受けたときに腎臓の1つが失われていたというブラジルや死刑囚の臓器が売買されている中国ではもっともらしさ，真実さをもっている。アフリカのヨーロッパ人が豊富な肉の供給を受けているのはアフリカの子どもたちが供給源だという噂やナイジェリアへ行ったニジェール人はイボ族に食われてしまうという噂は，比喩的な意味で真実といえるので，開発途上国の人々，特に貧しい人々にとっては，ありうることとして受け取られている[33]。

本稿で検討したアメリカ，インドネシア，アフリカの奇怪な都市伝説や噂は，いずれも我々でない外部の者，他者に対する恐怖を強調している。ただ，それぞれの噂において恐ろしい他者は異なっている。アメリカの都市伝説では，大都会の一見魅力的な女性が田舎から出てきた騙されやすい男性の敵であるが，恐ろしい罠に落ちるのは個人の不注意のせいである。恐ろしい他者はすぐそばで待ち構えている個人である。個人主義の社会では，個人の生命を脅かすのは個人であり，個人の責任で対処しなければならない。

インドネシアの奇怪な噂は，伝統社会が国民国家へ包摂されていく過程で生じている。現代の州や国家政府が恐ろしい他者であり，誘拐や首切りの危害を加えると言っている。かつてのヨーロッパ人植民者，宣教師，そして現代の外国人ツーリストも外部の者・恐ろしい他者として恐怖の対象とされている。恐ろしい他者は外部からやってくるのである。

アフリカの食人，臓器泥棒といった怪奇でおぞましい噂話も外部の者，他者に対する恐怖を伝えているが，グローバル資本主義が伝統的経済に侵入して貨幣経済が浸透しつつあるところで起きた出来事を説明している。それは，開発途上国の人々のグローバルな資本主義に対する不安を表現している。特に，貨幣に対する人々の欲望が高まって臓器泥棒のような恐ろしい危険なことが起きると言っている。また，親族でさえ他者，外部の者と同じで信用できないと言っている。それらの噂は，人間が商品に変えられてしまう危険の中に絶え間なく置かれていること，マーケットで生命力が奪われること，その前提である資本主義が引き起こした人々の飽くことのない破壊的欲求を表現している[34]と考えられる。そして，貧しい労働者にとって，恐ろしい他者とは，彼らを待ち構えている資本家と資本主義という新しい生産様式である。

身体毀損の噂は，先進国，中進国，開発途上国，それぞれで異なった言説になっているが，それぞれの社会における恐ろしい他者とリスクを伝えるメッセージを含んでいる。

注

1) 本稿では，書名は，邦訳書の書名でなく，原書の書名を掲げている。
2) DiFonzo, N. and P. Bordia, ***Rumor Psychology: Social and Organizational Approaches***, American Psychological Association, 2006, p. 13.
3) Ibid., p. 23.
4) 川上善郎『うわさが走る』サイエンス社，1997年，pp. 25–29.
5) Winzeler, B. L., ***Anthropology and Religion***, AltaMira Press, 2008, p. 140.

6) 以下，個別の噂の出典はつぎのとおりである。
① Douglass, M., Children Consumed and Children Cannibals In *Myth and Method*, edited by Patton, L. and W. Doniger, University Press of Virginia, 1996, p. 37.
② ③White, L., The Traffic in Heads: Bodies, Borders and the Articulation of Regional Histories, *Journal of Southern African Studies*, 23(2), 1997, p. 331.
④ Fine, G. A. and B. Ellis, *The Global Grapevine: Why Rumors of Terrorism, Immigration, and Trade Matter*, Oxford University Press, 2010, p. 178.
⑤ Ibid., pp. 178–179.
⑥ Hoskins, J., Predatory Voyeurs: Tourists and "Tribal Violence" in Remote Indonesia, *American Ethnologist*, 29(4), pp. 797–798.
⑦ Masqueier, A., Of Headhunters and Cannibals: Migrancy, Labor, and Consumption in the Mawri Imagination, *Cultural Anthropology*, 15(1), 2001, p. 92–93.
⑧ Ibid., pp. 93–94.
⑨ Ibid., pp. 94–95.
7) Winzeler, B. L., op. cit., pp. 139–140.
8) M・ダグラス（塚本利明訳）『汚穢と禁忌』ちくま学芸文庫，2009年，p. 279.
9) Donovan, P., *No Way of Knowing*, Routledge, 2004.
10) Fine, G. A., B. Ellis, op. cit.
11) Bennett, G., *Bodies*, University Press of Mississippi, 2005.
12) Campion-Vincent, V., *Organ Theft Legends*, University Press of Mississippi, 2005.
13) 拙稿「グローバリゼーションと臓器泥棒の噂」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第17号，2010年。
14) Comaroff, J. and J. L. Comaroff, Occult Economies and the Violence of Abstraction, *American Ethnologist*, 26(2), 1999, p. 280.
15) Jarosz, L. A., Agents of Power, Landscape of Fear: the Vampires and Heart Thieves of Madagascar, *Environment and Planning D: Society and Space*, 12(4), 1994.
16) Bhar, S., A Headhunter Scare in a Simunul Bajau Village in Sandakan, 1979, *Borneo Research Bulletin*, 12(1), 1980, pp. 26–27.
17) ハッドンは，1894年，サラワクにおける白人の首狩り人の話を報告している。Drake, R. A., Construction Sacrifice and Kidnapping Rumor Panics in Borneo, *Oceania*, 59(4), 1989, p. 271.
18) Ibid., pp. 269–279.
19) Forth, G., Construction Sacrifice and Head-Hunting Rumours in Central Flores (Eastern Indonesia): A Comparative Note, *Oceania*, 61(3), 1991.
20) Erb, M., Construction Sacrifice, Rumors and Kidnapping Scares in Manggarai: Further Comparative Notes from Flores, *Oceania*, 62(2), 1991.
21) Barnes, R. H., Construction Sacrifice, Kidnapping and Head-hunting Rumors on Frores and Elsewhere in Indonesia, *Oceania*, 64(2), 1993.
22) Tsing, A. L., Telling Violence in the Meratus Mountains In *Headhunting and the Social Imagination in Southeast Asia*, edited by Hoskins, J. Stanford University Press, 1996, pp. 200–201.
23) 杉島敬志「首狩り人の幻想」『季刊民族学』第34号，1985年。
24) 同上，p. 45.
25) この部分の記述はウィキペディアその他を参考にした。

26) Masquelier, A., op. cit.
27) W・アレン（折島正司訳）『人喰いの神話―人類学とカニバリズム』岩波書店，1982年，p. 186.
28) 同上，p. 194.
29) Jarosz, L. A., op. cit., P. 430.
30) K・マルクス（向坂逸郎訳）『資本論第1巻』岩波書店，1967年，p. 300.
31) 同上，p. 391.
32) White, L., *Speaking with Vampires: Rumor and History in Colonial Africa*, The University of California Press, 2000.
33) Winzeler, B. L., op. cit., pp. 140–141.
34) Comaroff, J. and J. Comaroff, Introduction In *Modernity and Its Malcontents: Ritual and Power in Postcolonial Africa*, edited by Comaroff, J. and J. Comaroff, The University of Chicago Press, 1993, p. xxix.

Summary

Images of Society Seen through Body-parts Rumors

WATANABE Yoshitomo

This paper is an attempt to investigate the relationship between rumors and the images of societies that the rumors talk about. In the contemporary world many strange and dreadful rumors are circulated. One class of these seems to be rumors relating to body parts. For example, in America and Europe an urban legend of a kidney snatcher is widespread, in developing countries there is a baby-parts story which says that ingenuous babies are kidnapped or bought by Americans and brought to America to butcher for use in organ transplants.

In this paper three body-parts rumors are analyzed, namely, the urban legend of a kidney snatcher in America, construction sacrifice, kidnapping and headhunting rumors in Indonesia, and the rumor of headhunters and cannibals of Nigeria spread in Niger.

After analyzing these rumors, hidden features of each society are articulated. In America the wicked is an individual and an individual trapped into the crime, and urban legends advise to avoid the crime by one's attentiveness. In Indonesia the wicked are outsiders, for example, state, national government and foreigners, and they come to appropriate innocent resources including human life. In underdeveloped Niger, the rumor says that in Nigeria migrants from Niger are headhunted and eaten by cannibals. It says that in capitalist society, the wicked capitalist exploits their laborers to maximize his profits. These body-parts rumors highlight the dangerous side of contemporary capitalist society in which humans seem in constant danger of turning into commodities, of losing their life power to the market and to the destructive desires it evokes.

Key Words: rumor, urban legend, body parts story, kidney snatcher, Indonesia, Africa, headhunter, cannibal, capitalism

ISSN 0385-6801

青山學院女子短期大學

紀　要

第六十四輯

平成22年12月 刊

JOURNAL

OF

AOYAMA GAKUIN
WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

NO. 64

DECEMBER, 2010

目　次

脳死・臓器移植をめぐる公共的議論と法の役割
……河　見　　誠……1

詞的情景論・（1）――「海辺の別れ」という詞場――
ミュージシャンを読むためのストラテジとしての詞作品研究の課題
……おかざきかずお……1

個人語彙規模の測定に関する一考察
……高　野　嘉　明……9

EFL Wordlists: The Need for a Modern Learner Lexicon
……Joseph Phillips……27

女子短期大学生の環境意識……梅澤香代子、宮川香織、廣田道夫……37
日清戦争開戦前夜の思想状況
——金玉均暗殺事件をめぐる一考察——……小林瑞乃……45
バイオ燃料に関するアメリカの動向について……信澤久美子……65
英国産業連盟と1920年代不況
——デフレーションと構造調整——……秋富創……77
身体毀損の噂に見る社会の表象……渡辺良智……93
先行経験が意思決定における後悔に及ぼす影響……武田美亜……111

現代ロシア社会における子どもの養育をめぐる諸問題……村知稔三……123
習得の時短のための救急蘇生法トレーニング・プログラムの構造解析……渡部かなえ……141
ピースメーキングとキリスト教……シェロ マイク……151
フォーマル・スキーマとしての5文型と英文理解……黒岩裕……159
食事場面での母親の行動認識と、感情対処方略としての食行動が、摂食障害傾向に及ぼす影響……田中志帆……169
青山学院女子短期大学研究成果一覧……187

CONTENTS

OKAZAKI Kazuo
On the Poetical Background of Popular Song 1

TAKANO Yoshiaki
A Note on the Measurement of Personal Vocabulary Size 9

Joseph Phillips
EFL Wordlists: The Need for a Modern Learner Lexicon 27

UMEZAWA Kayoko, MIYAGAWA Kaori, HIROTA Michio
Study of Ecological Awareness of Women's Junior College Students 37

KOBAYASHI Mizuno
The Logic Behind a Justification of the Sino-Japanese War
—An analysis of Japanese newspaper claims over the assassination of the Korean reform politician Kim Okgyun— 45

NOBUSAWA Kumiko
Biofuel Problems in the U.S. 65

AKITOMI Hajime
The Federation of British Industries and the Depression in the 1920s:
—Deflation and Structural Adjustment— 77

WATANABE Yoshitomo
Images of Society Seen through Body-parts Rumors 93

TAKEDA Mia
The Effects of Prior Experience on Regret in Decision-Making 111

MURACHI Toshimi
The Problems Surrounding the Upbringing of Infants and Children in Contemporary Russia ····· 123

WATANABE Kanae
An Efficient Program for Basic Life Support Training Designed to Shorten the Time for Mastery ····· 141

Mike Sherrill
Peacemaking and Christianity ····· 151

KUROIWA Yutaka
Reading Comprehension and Five Sentence Patterns as a Formal Schema ····· 159

TANAKA Shiho
The Influences of Mother-Child Mealtime Interaction during Childhood, and Emotional Eating on Eating Problems among under Graduate Women ····· 169

KAWAMI Makoto
Public Discourse on Brain Death and Organ Transplantation: the Role of Law ····· 1

編集委員

宮田雅智　中井章子
藤本勝義　大野芳材
池田孝一　浅見　均
石井孝彦

執筆者（五十音順）

秋富　創　准教授
岡崎和夫　教　授
河見　誠　教　授
黒岩　裕　准教授
小林瑞乃　専任講師
シェロ　マイク　准教授
高野嘉明　教　授
武田美亜　専任講師
田中志帆　准教授
信澤久美子　准教授
※廣田道夫　教　授
Phillips, Joseph　准教授
村知稔三　教　授
渡部かなえ　教　授
渡辺良智　教　授
※梅澤香代子（本学非常勤講師）
※宮川香織（本学家政学科副手）

※印は共同執筆者

平成二十二年十二月十日発行
青山學院女子短期大學紀要　第六十四輯
編集・発行　青山学院女子短期大学
東京都渋谷区渋谷四ノ四ノ二五
印刷　丸善株式会社